

青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連¹

高 坂 康 雅*

本研究の目的は、青年が容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連を明らかにすることである。中学生、高校生、大学生 545 名を対象に、劣性の認知を尋ねる項目、劣性を認知したときに生じる感情に関する項目、反応行動に関する項目について回答を求めた。分析の結果、反応行動は、他者回避、直接的な努力、他者攻撃、気晴らし、放置、賞賛・承認希求、代理補償の 7 種類に分けられた。また、直接的な努力は憧憬感情と、他者攻撃と賞賛・承認希求は敵意感情と、気晴らしは不満感情と、放置と代理補償は悲哀感情と自己肯定感情とそれぞれ関連しており、他者回避は中学生・高校生では不満感情と関連し、大学生では悲哀感情と関連していた。これらの結果から、容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との間には、特定の結びつきがあることが確認された。

キーワード：容姿・容貌、反応行動、青年期、劣等感

問 題

本研究の目的は、青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連を明らかにすることである。

青年期は、急激な身体的変化による個人差の発生や、身体的変化に伴う自己概念・価値観の不安定化、受験や就職のような競争による自他の差異の意識化などによって、他者との比較が生じやすい時期である。高田 (1999) は、高校生や大学生で社会的比較が最も頻繁に行われていることや、高校生や大学生が社会的比較をする理由として、自己不確実感(自分に自信がなく不安だ)や状況不確実感(自分のすべきことや進む方向がわからない)などが多く選ばれていることを明らかにしている。ここから、青年が不安定な自己の状態を明確に認識するために他者との比較を行っていることが推測されるが、このような他者との比較は必ずしも青年にとって肯定的に働くとは限らない。高田 (1994) は大学生を対象とした社会的比較の実態調査によって、社会的比較の結

果、劣等感が生じていることを明らかにしている。また、島 (1988) は、高校生と大学生を対象とした容姿やプロポーションの自己評価に関する調査を実施し、高校生の 41.1% (221 名中 91 名)、大学生の 22.1% (240 名中 53 名) が、自身の容姿やプロポーションを「劣っている」と評価していることを明らかにしている。「劣等感」という苦しい感情に悩まされるということがどんなことかわからないと報告している学生は全体の 10% 以下にすぎない」(Allport, 1937) や、「青年期は他の時期に比べて劣等感が強く感じられる時期である」(返田, 1986) という指摘を踏まえると、多くの青年は、不明確な自己像を同定しようとして行われる他者との比較によって、劣等感を抱いていると考えられる。

劣等感については、Adler が劣等感の補償を概念化して以来、人格形成や適応に向かう動機づけとなる感情であるとされている。しかし、Adler (1932) は、劣等感が青年にとってポジティブな影響を持つ一方、ひきこもりや非行の原因にもなりうると述べている。また、根本 (1997) も「劣等感情から子どもは優越欲求を発達させる。優越欲求は子どもに意欲を生み出し、建設的な行動にむかわせる。しかし、この行動がうまくいかない場合、優越欲求は屈折した形で表現され、非建設的な多様な行動様式をとらせる」と述べている。これらが述べるように、劣等感とは、自己の劣性を補うような努力を生み出しもするが、他者を回避するような行動や、他者に対する攻撃行動などを引き起こす感情でもあると言える。本研究では、劣等感などの感情によっ

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒305-0006 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学心理学系事務室
yasu-ksk@human.tsukuba.ac.jp

¹ 本論文は、日本青年心理学会第 15 回大会にて発表したものを、加筆・修正したものである。(高坂康雅 (2007). 青年期における容姿・容貌に対する主観的劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連 日本青年心理学会第 15 回大会発表論文集, 44-47.)

て引き起こされる行動を、反応行動²と呼ぶ。

劣等感の反応行動について、Wallin (1949) は、逃避反応、闘争反応、好ましからぬ性格特徴の発展、を挙げている。返田 (1986) も Wallin (1949) と類似した、3種類の劣等感反応タイプを挙げている。また、宮城 (1979) は5種類の補償を挙げている。さらに、依田 (1982) は6種類の反応行動を挙げ、根本 (1997) は、9種類の反応行動を、筒井 (1975) は11種類の補償行動を挙げている。このように、劣等感反応や補償など用語は異なるものの、概して劣等感の反応行動に関する理論的研究は多くなされている。しかし、劣等感の反応行動に関する実証的な研究は、非常に少ない。劣等感の反応行動に関わる研究として、落合 (1989) は大学生を対象として顔に対する劣等感の解消法について、選択式と記述式の2通りの方法で調査を行ったところ、選択式の回答では、補償に相当する「顔を美しく」という回答や、代理補償に相当する「勉強で努力」、「勉強以外で努力」という回答、「顔は大事ではない」という価値観の転換に関わる回答などが得られ、また「自由記述の結果、誉められるといった他者からの評価の上昇や、劣った者をみるといった他者との関係による解消もかなり多くみられた」(落合, 1989) としている。また、小笠原・甲村 (1999) は他者との比較によって生じる劣位感情への対処行動について調査を実施している。劣位感情の対処行動19項目に対して、どの程度用いたか、どの程度効果があったかについて、回答を求めた。その結果、用いられた対処行動として、男女とも「自分は自分と考えた」や「それをよくしようと努力した」が多く用いられていること、対処行動の効果については、「誰かに話して発散」、「他のことで発

散」、「自分は自分だと考えた」、「開き直った」などが、効果があったと評定され、「相手を避ける」、「忘れるようにした」、「八つ当たりする」、「何もしない」、「やけ食い」は効果がなかったと評定されていることを明らかにした。

このように、劣等感の反応行動は多様であり、その多様性は、理論的研究において十分に示されてきた。しかし、これまでの研究では、理論的に想定される劣等感の反応行動を列挙するだけに留まっており、反応行動に関わる実証的な研究は落合 (1989) や小笠原・甲村 (1999) 以外、国内外を通して見当たらない。また、落合 (1989) や小笠原・甲村 (1999) は、劣等感の反応行動そのものを捉えた研究とは言えず、さらに、これらで用いられている選択肢や項目が、どのような手続きで、作成、選定されたか明確にされておらず、これらの研究が、劣等感の反応行動を十分に網羅できているとは言いがたい。

劣等感の反応行動に関する研究の別の問題点として、一人の青年が特定の劣等感に対して、同時に示すとは想定できない反応行動が併記されているという点が挙げられる。例えば、根本 (1997) は劣等感の反応行動を9種類提示しているが、そのなかには「他者への反抗」と、他者に従順であろうとする「過剰適応」という、相反する反応行動がみられる。しかし、一人の青年がある劣等感を抱いたときに、反抗と過剰適応を同時に行うとは考えにくく、ある青年は劣等感によって他者への反抗を示し、別の青年は過剰に適応しようとすると考えた方が妥当であろう。これまでの劣等感の反応行動に関する論究では、反応行動が列挙されるだけで、青年によって生じる反応行動が異なる理由については論じられてこなかった。

通常、劣等感は何らかの劣性を認知したときに生じる感情として捉えられる(野村, 1981)。しかし、野田 (1997) や関 (1974) は、劣性を認知したときには様々な否定感情が生じ、それらを総称して劣等感と呼んでいると述べている。高坂 (印刷中) は「劣等感是自己の劣性を認知したときに生じる否定感情の総称である」という立場から、容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情の分析を行っている。その結果、青年が容姿・容貌に対する劣性を認知したとき、不満感情、悲哀感情、自我萎縮感情、敵意感情、憧憬感情、自己肯定感情という6つの感情が生じ、これらのうち、不満感情、悲哀感情、自我萎縮感情、敵意感情の4種類が、容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる劣等感の具体的感情であるとしている。そして、容姿・容貌に対

² 小笠原・甲村 (1999) は、「対処行動」という語を用いているが、対処行動はストレス反応の低減を目的とした行動である(岡安, 1999)。本研究に置き換えれば、容姿・容貌に対する劣性の認知によって生じた感情の低減を目的とした行動となる。また、落合 (1989) の「解消法」は、実際に感情が低減した行動であると言える。さらに、宮城 (1979) などが用いている「補償」は、劣等感との関連が強い語である。しかし、本研究で扱う行動が、感情の低減を目的とした行動であるか、または実際に感情を低減させた行動であるかについては、明らかにすることができていないため、「対処行動」や「解消法」は適さない。また、本研究で扱っている感情には、憧憬感情や自己肯定感情は、高坂 (印刷中) において劣等感には含まれない感情とされていることから、劣等感との関連が強い用語である「補償」を用いることも適切ではないと考える。そこで、本研究では、劣等感に特化しておらず、感情の低減が目的とされていたかや実際に低減したかに関わらない表現として、反応行動を用いることとした。

する劣性を認知したときに生じる感情の違いが、その後の反応行動の違いとして現れるのではないかと推測している。これは、小笠原・甲村 (1999) が「劣位感情の感じ方や受け取り方には個人差がともなうものであるため、その対処にも個人差があろう」と考察していることと一致する。

これらの指摘を踏まえると、どのような反応行動が生起するかは、劣性を認知したときに生じる感情の違いによると考えられる。Neu (1980) は妬み感情を憧憬的妬みと悪意的妬みに分類し、どちらの妬みを感じるかによって、その後の行動が異なることを指摘している。また、菊池 (2003) は、罪悪感と向社会的行動の間には正の関連がみられるのに対し、恥は向社会的行動と関連しないことを明らかにしている。さらに、榎本 (1999) は友人に対する感情と友人との行動の結びつきは、どの学校段階においてもある程度一貫していることを示した。これらの研究から、どのような感情が生じるかによって、その後の行動が異なり、その感情と行動の結びつきは、どの学校段階でも一貫していることが示唆されている。ここから、本研究においても、劣性を認知したときに生じる感情によって、反応行動が異なり、それは学校段階を問わず一貫したものであることが予測される。

そこで、本研究では、「劣等感是自己の劣性を認知したときに生じる否定感情の総称である」という立場から、劣等感の反応行動の違いを、劣等感の具体的感情の違いから明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、容姿・容貌に対する劣等感について取り上げる。これは、返田 (1986) において「青年期の劣等感の中で、容姿や容貌がかなり重要な要因として作用」と述べているためである。また、容姿・容貌に対する劣等感のなかでも、身体的障害や欠損ではなく、容姿の良し悪しのような青年自身の主観的な評価に基づく劣性を扱うこととした。さらに、容姿・容貌に対する劣性を認知したときには、否定的な感情だけではなく、憧憬感情や自己肯定感情のような肯定的な感情が生じることが示されている (高坂, 印刷中) ため、容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる否定的な感情と肯定的な感情をあわせて「感情」と表記することとした。

予 備 調 査

目的

青年が容姿・容貌に対する劣性を認知したときにとる反応行動を把握する。

方法

調査回答者 分析を行った調査回答者は、M県内の中学 1～3 年生 204 名 (男子 101 名, 女子 103 名; 平均年齢 13.25 歳, 標準偏差 0.92 歳), M県内の工業高校 1～3 年生 173 名 (男子 98 名, 女子 75 名; 平均年齢 16.27 歳, 標準偏差 0.98 歳), I 県内の大学生 172 名 (男子 85 名, 女子 87 名; 平均年齢 19.88 歳, 標準偏差 1.19 歳) であった。

調査時期 2006 年 6 - 7 月。

調査内容 「自分が人とくらべて顔やスタイルが良くないと感じると___。」という未完成任务を 5 つ提示し、「普段の生活の中で、自分が人とくらべて顔やスタイルが良くないと感じたとき、あなたはどのような行動をしますか。」という教示のもと、下線部に書き入れるよう求めた。

結果と考察

得られた記述のうち、「容姿・容貌に対する劣性を認知したときの反応行動」と見なすことのできない記述を除き、中学生 339 個 (男子 129 個, 女子 210 個), 高校生 259 個 (男子 120 個, 女子 139 個), 大学生 295 個 (男子 123 個, 女子 172 個), 合計 893 個 (男子 372 個, 女子 521 個) を分析対象とした。

根本 (1997) や落合 (1989) など、劣等感の反応行動に関する研究や、劣等感と類似した感情とされることもある孤独感の対処方略の研究 (工藤, 1986; 宮下・細川, 1993 など) を参考に、記述の分類を行った結果、13 カテゴリーに分類された (Table 1)。Table 1 をみると、「ダイエットをする」のような「直接的努力」が男女ともに多くみられているが、特に女子では、63.5%もの記述が「直接的努力」に分類された。次いで、「何もしない」、「あきらめる」のような「放棄・諦め」が多くみられたが、「直接的努力」と異なり、「放棄・諦め」は男子の方が、女子よりも多くみられた。一方、これまでの劣等感の反応行動に関する研究の多くで指摘されてきた「他者攻撃」や「他者卑下」のような、他者に対するネガティブな反応行動に分類された記述は男女とも少数であった。

本 調 査³

目的

青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときの反応行動を分析し、感情との関連を検討する。

方法

調査回答者 分析を行った調査回答者は、I 県内の中学生 207 名 (男子 93 名, 女子 114 名; 平均年齢 13.16 歳, 標準偏差 0.93 歳), 普通科高校 1・2 年生 188 名 (男子 60 名,

Table 1 容姿・容貌に対する劣性を認知したときの反応行動に関する記述の整理 (%)

	中学生		高校生		大学生		全体		記述例
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
A 直接的努力	55(42.6)	138(63.0)	55(45.8)	97(69.8)	45(36.6)	96(55.8)	155(41.7)	331(63.5)	ダイエットをする
B 代理補償	2(1.6)	8(3.8)	15(12.5)	7(5.0)	13(10.6)	8(4.7)	30(8.1)	23(4.4)	勉強を頑張る
C 回避的思考	7(5.4)	12(5.7)	4(3.3)	7(5.0)	10(8.1)	16(9.3)	21(5.6)	35(6.7)	開き直る
D 気晴らし	4(3.1)	5(2.4)	4(3.3)	1(0.7)	5(4.1)	5(2.9)	13(3.5)	11(2.1)	音楽を聴いてごまかす
E 放棄・諦め	49(38.0)	26(12.4)	32(26.7)	18(12.9)	37(30.1)	18(10.5)	118(31.7)	62(11.9)	何もしない, あきらめる
F 他者依拠	5(3.9)	10(4.8)	8(6.7)	7(5.0)	4(3.3)	13(7.6)	17(4.6)	30(5.8)	真似する
G 賞賛・承認希求	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)	0(0.0)	1(0.6)	0(0.0)	2(0.4)	慰めてもらう
H 注目希求	1(0.8)	4(1.9)	2(1.7)	1(0.7)	2(1.6)	3(1.7)	5(1.3)	8(1.5)	明るく振舞う
I 他者接近	1(0.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.8)	0(0.0)	2(0.5)	0(0.0)	友達になる
J 他者攻撃	2(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.8)	3(1.7)	3(0.8)	3(0.6)	悪口を言う
K 下方比較	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.8)	1(0.6)	1(0.0)	1(0.0)	もっとひどい人を探す
L 注目回避	1(0.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.8)	2(1.2)	2(0.5)	2(0.4)	目立たない服装を選ぶ
M 他者回避	2(1.6)	6(2.9)	0(0.0)	0(0.0)	3(2.4)	6(3.5)	5(1.3)	12(2.3)	外に出ない
	129(100.0)	210(100.0)	120(100.0)	139(100.0)	123(100.0)	172(100.0)	372(100.0)	521(100.0)	

女子 128 名; 平均年齢 15.72 歳; 標準偏差 0.61 歳), 大学生 150 名 (男子 60 名, 女子 90 名; 平均年齢 20.33 歳, 標準偏差 1.49 歳) であった。

調査時期 2007 年 6 - 7 月。

調査内容 劣性認知項目: 高坂 (印刷中) の劣性認知項目 6 項目を用いた。「あなたは普段の生活の中でそれぞれの項目のように感じるものがどのくらいありますか。」という教示のもと, 「いつもある」(4 点), 「時々ある」(3 点), 「たまにある」(2 点), 「まったくない」(1 点) の 4 件法で回答を求めた。劣性認知項目 6 項目すべてに対し, 「まったくない」と回答した人を除いて, 感情項目, 反応行動項目への回答を求めた。

感情項目: 高坂 (印刷中) の感情項目 62 項目を用いた。「普段の生活の中で, 人とくらべて容姿や容貌 (顔やスタイル) が良くないと感じたとき, あなたはどのような気持ちになりますか。」という教示のもと, 「とても感じる」(5 点), 「やや感じる」(4 点), 「どちらともいえない」(3 点), 「あまり感じない」(2 点), 「まったく感じない」(1 点) の 5 件法で回答を求めた。

反応行動項目: 予備調査でみられた 13 カテゴリーについて, 各 4 項目ずつ, 合計 52 項目を作成し, 反応行動項目とした。「普段の生活の中で, 人とくらべて容姿や容貌 (顔やスタイル) が良くないと感じたとき, あなたは以下のような行動をどの程度しますか。」という教示のもと, 「いつもする」(5 点), 「よくする」(4 点), 「時々する」(3 点), 「あまりしない」(2 点), 「まったくしない」(1 点) の 5 件法で回答を求めた。

実施方法と倫理的配慮 調査は, 中学生や高校生では, 学級担任などが学級単位で集団で実施し, 大学生

では講義時間の一部を使って, 著者が集団で実施した。いずれの場合も, 調査への協力は任意であること, 回答を拒否できることや回答を中断できることなどを紙面に明記し, 口頭でも伝えた。また, 回答によって心身の不調が生じる可能性を考慮し, 実施した中学校と高校では, 養護教諭などに, 不調が生じた場合の対応と著者への連絡を依頼した。

結果

感情項目, 反応行動項目の因子分析 劣性認知項目 6 項目すべてに対し, 「まったくない」と回答した回答者は, 中学生 36 名 (男子 30 名, 女子 6 名), 高校生 5 名 (男子 3 名, 女子 2 名), 大学生 1 名 (男子 1 名, 女子 0 名) であった。これらの回答者は, 普段の生活のなかで, 容姿・容貌に対する劣性を認知していないと判断されるため, これ以降の分析から除外した。

感情項目 62 項目について, 高坂 (印刷中) が 6 因子を抽出していることから, 因子数を 6 に指定して, 最尤法・promax 回転による因子分析を行った (Table 2)。その結果, 高坂 (印刷中) とほぼ同様の 6 因子が抽出された。そこで, 高坂 (印刷中) にあわせて, 第 1 因子から順に, 「不満感情」, 「悲哀感情」, 「敵意感情」, 「自己肯定感情」, 「憧憬感情」, 「自責感情」と命名した。

反応行動項目 52 項目についても, 最尤法による因子分析を行った。その結果, 固有値 1.0 以上で 10 因子が抽出されたため, 因子数を 10 から減らしながら最尤法・promax 回転による因子分析を行ったところ, 因子の解釈から, 7 因子解が最適であると判断された (Table 3)。第 1 因子は, 6 M 「たくさんの人がいる場所を避ける」(.82), 10 L 「目立たないように振舞う」(.79) など, M 「他者回避」や L 「注目回避」の項目で構成されている。他者との関わりや注目を避けようと

³ 本調査は, 筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理委員会の承認を得て行った。

Table 2 感情項目の因子分析結果 (最尤法・promax回転後)

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2	平均(標準偏差)
第1因子「不満感情」								
58: いらいらした気持ち (いらだち)	.79	-.13	.18	.04	-.02	-.09	.65	2.25(1.29)
48: つまらない気持ち (つまらなさ)	.79	-.16	.09	-.10	.05	-.01	.52	2.25(1.22)
59: やる気が起こらない感じ (無気力感)	.75	-.06	.10	.04	-.13	-.10	.57	2.23(1.26)
41: しらけた気持ち (しらけ)	.73	-.07	.09	-.08	-.11	.12	.55	2.08(1.18)
61: 不快な気持ち (不快感)	.71	.14	.05	.01	-.15	-.13	.66	2.39(1.32)
60: 情けなく思う気持ち (情けなさ)	.64	.25	-.07	.02	-.09	-.03	.62	2.44(1.38)
31: とまどいの気持ち (戸惑い)	.64	.09	-.08	-.07	.01	.21	.50	2.07(1.13)
42: なんとなく不安な気持ち (漠然とした不安)	.63	.12	-.17	-.11	.08	.17	.46	2.48(1.30)
54: さみしい気持ち (さみしさ)	.62	.19	-.05	-.03	-.08	.07	.53	2.19(1.25)
36: 面倒な気持ち (面倒)	.59	.04	-.06	-.07	-.10	.18	.39	2.25(1.26)
38: むかついた気持ち (むかつき)	.58	-.19	.42	-.03	.01	.11	.64	2.05(1.22)
45: あせる気持ち (焦燥感)	.58	.11	-.11	.08	.22	.01	.52	2.68(1.32)
34: 恥ずかしい気持ち (恥)	.56	.19	-.13	.04	.11	.07	.51	2.66(1.37)
46: 自分のことが心配になる感じ (心配)	.54	.14	-.13	-.01	.20	.09	.45	2.83(1.31)
62: くやしい気持ち (悔しさ)	.54	.01	.20	-.06	.13	-.16	.49	2.50(1.34)
53: やりきれない気持ち (やりきれなさ)	.54	.21	.10	-.02	-.01	-.05	.58	2.31(1.24)
25: 動揺 (動揺)	.53	.00	.02	-.08	.09	.22	.39	2.13(1.15)
33: 自分の将来に対する不安 (将来への不安)	.52	.01	-.04	.11	.11	.24	.44	2.42(1.35)
39: むなしい気持ち (空虚感)	.51	.31	.10	-.07	-.02	-.08	.64	2.50(1.32)
40: 嫌な気持ち (嫌気)	.50	.35	.11	.01	-.14	-.02	.70	2.56(1.43)
50: 自分がちっぽけだという感じ (卑小感)	.49	.12	.01	.11	.03	.07	.44	2.42(1.30)
47: 差別された気持ち (被差別感)	.47	-.03	.24	.06	.03	.11	.45	2.17(1.18)
30: 絶望的な気持ち (絶望感)	.47	.29	.04	.09	-.04	.10	.62	2.02(1.23)
57: 悩む気持ち (悩み)	.46	.31	-.13	.06	.12	-.07	.52	2.83(1.45)
55: 自分のことが嫌いになる感じ (自己嫌悪感)	.39	.14	.09	.32	.02	-.07	.53	2.52(1.38)
49: 自分がかわいそうだという気持ち (哀れみ)	.36	.08	.27	.04	.15	.01	.46	2.15(1.20)
17: 後悔する気持ち (後悔)	.32	.27	-.01	-.03	.13	.29	.47	2.25(1.31)
第2因子「悲哀感情」								
5: みじめな気持ち (悔みさ)	-.17	.90	.04	.04	-.02	-.03	.66	3.10(1.33)
9: 悲しい気持ち (悲しさ)	-.06	.86	-.01	-.03	.01	.15	.67	2.91(1.31)
16: つらい気持ち (辛さ)	.16	.71	-.05	-.08	.01	.14	.67	2.61(1.33)
29: 憂うつな気持ち (憂うつ)	.32	.65	-.07	-.05	-.14	-.11	.67	2.64(1.36)
2: 切ない気持ち (切なさ)	.06	.64	-.10	-.04	.11	.00	.46	3.09(1.26)
27: 暗い気持ち (暗さ)	.30	.63	.03	-.03	-.25	-.05	.70	2.53(1.35)
32: 落ち込む気持ち (落胆)	.43	.60	-.17	-.02	-.12	-.11	.71	2.78(1.39)
23: うんざりした気持ち (うんざり)	.22	.58	.04	.02	-.14	.09	.60	2.47(1.27)
44: 自信がなくなる感じ (自信喪失)	.29	.54	-.10	.07	.12	-.11	.66	3.01(1.41)
21: 残念な気持ち (残念)	.29	.54	.01	-.15	.07	.03	.60	2.78(1.30)
35: 自分自身に失望する気持ち (失望)	.25	.51	.05	.15	-.06	.05	.65	2.50(1.36)
8: 自分の価値が下がったような感じ (自己価値の低下)	-.07	.49	.19	.09	.01	.20	.41	2.63(1.15)
18: 損した気分 (損した気分)	.14	.49	.15	-.06	.12	.05	.53	2.78(1.36)
28: 自分のことを否定する気持ち (自己否定感)	.18	.46	.05	.21	-.02	.02	.53	2.58(1.33)
52: あきらめの気持ち (諦め)	.04	.41	.02	-.19	-.01	.00	.18	2.73(1.29)
1: いじける気持ち (いじけ)	.18	.35	.09	-.05	.08	.02	.32	2.79(1.23)
第3因子「敵意感情」								
11: 顔やスタイルが良い人にくむ気持ち (憎しみ)	-.12	.09	.87	-.04	-.09	.12	.75	1.70(1.00)
19: 顔やスタイルが良い人を嫌う気持ち (嫌悪感)	.01	.02	.79	-.08	-.10	.08	.67	1.66(0.97)
26: 顔やスタイルが良い人をうらむ気持ち (優勢者への恨み)	.04	-.01	.78	.01	-.06	.01	.63	1.76(1.07)
4: 顔やスタイルが良い人に腹を立てる気持ち (怒り)	-.09	.06	.76	-.03	.01	.08	.57	1.94(1.08)
24: 顔やスタイルが良い人をひがむ気持ち (ひがみ)	-.07	.21	.71	.00	-.02	-.10	.62	2.08(1.19)
56: 顔やスタイルが良い人と競い合いたい気持ち (競争心)	.24	-.33	.49	-.06	.17	-.11	.28	1.93(1.17)
12: 不公平な感じ (不公平感)	-.12	.45	.45	.04	.12	-.03	.55	2.65(1.38)
51: 親をうらむ気持ち (親への恨み)	.18	-.06	.42	.14	.05	.01	.31	1.71(1.05)
13: 負けた気持ち (敗北感)	.01	.32	.39	.00	.13	-.02	.44	2.60(1.30)
第4因子「自己肯定感情」								
14: 顔やスタイルが良くなくても自分の顔やスタイルに納得している感じ (納得)	.06	.10	-.06	-.85	.00	-.07	.65	2.59(1.09)
7: 顔やスタイルが良くなくても自分の顔やスタイルに満足している気持ち (満足感)	.01	.06	.04	-.82	.00	.00	.63	2.50(1.02)
22: 顔やスタイルが良くなくても自分の顔やスタイルが好きだという気持ち (好意)	.07	.03	.10	-.81	.05	-.07	.62	2.59(1.05)
43: 顔やスタイルが良くなくても今のままで良いという気持ち (受容感)	-.02	-.09	.03	-.51	-.05	.15	.35	2.66(1.17)
第5因子「憧憬感情」								
15: 顔やスタイルが良い人を尊敬する気持ち (尊敬)	-.05	-.09	.02	.07	.66	.24	.44	3.05(1.26)
20: 顔やスタイルが良い人に感心する気持ち (感心)	.16	-.09	-.06	-.05	.61	.07	.38	3.30(1.16)
6: 顔やスタイルが良い人にあこがれる気持ち (憧れ)	-.26	.53	-.03	-.03	.53	-.14	.58	4.12(1.03)
37: 顔やスタイルが良い人をうらやましく思う気持ち (羨望)	-.02	.29	.12	-.05	.47	-.19	.46	3.57(1.33)
第6因子「自責感情」								
10: 罪悪感 (罪悪感)	.19	.01	.14	.02	.05	.58	.49	1.71(1.04)
3: 申し訳ない気持ち (申し訳なさ)	.28	.04	-.03	.02	.08	.51	.41	1.91(1.06)
得点間相関 (左下) \ 因子間相関 (右上)								
不満	不満	悲哀	敵意	肯定	憧憬	自責		
悲哀感情	-.76	.62	.29	.22	.21		2.38(0.97)	
敵意感情	.87	-.51	.32	.33	.09		2.75(1.00)	
自己肯定感情	.64	.59	-.08	.08	.15		1.83(0.82)	
憧憬感情	-.21	-.22	n.s.	-.02	-.04		2.58(0.87)	
自責感情	.31	.35	.18	n.s.	-.03		3.31(0.97)	
	.50	.44	.38	n.s.	.16		1.81(0.91)	
各因子への負荷量が.40以上の項目の α 係数								
	.97	.95	.88	.82	.67	.67		

a) 各因子に対し.40以上の負荷量を太枠で囲った。

b) 各項目末尾の()内は感情名である。

c) 「自己肯定感情」は因子間相関では高くなるほど感情は低くなり、平均・得点間相関では、高くなるほど感情は高くなるように表記されている。

d) 記載されている得点間相関はすべて5%水準で有意である。

する行動であると考えられるため、第1因子を「他者回避」と命名した。第2因子は、28 A「顔やスタイルが良くなりそうな方法を試す」(.96), 19 F「顔やスタイルが良い人を目標・見本にする」(.85) など、A「直接的な努力」とF「他者依拠」の項目から構成されている。他者を参考としながら、顔やスタイルを改善しようとする行動であると考えられるため、第2因子を「直接的な努力」と命名した。第3因子は、43 K「他の人を低く評価する」(.82), 48 J「顔やスタイルが良い人の悪口を言う」(.79) など、J「他者攻撃」とK「下方比較」の項目から構成されている。いずれも他者に対する攻撃的な行動であると考えられるため、第3因子を「他者攻撃」と命名した。第4因子は、24 I「友だちと一緒にいるようにする」(.84), 25 D「気にしないためにテレビや映画を観る」(.59) など、主にD「気晴らし」とI「他者接近」の項目で構成されている。一人で過ごすか、友だちなどと一緒に過ごすかの違いはあるが、いずれも顔やスタイルが良くないことを考えないようにしようとしている行動であると考えられる。そこで、第4因子を「気晴らし」と命名した。第5因子は、8 E「そのまま放っておく」(.87), 32 E「そのままにしておく」(.82) など、ほとんどがE「放置」の項目で構成されている。顔やスタイルが良くないと思っても、顔やスタイルに対し、特別なことはせずに、そのままにしておく行動であると考えられるため、第5因子を「放置」と命名した。第6因子は、34 G「はげましの言葉をかけてもらう」(.92), 23 G「誰かになぐさめてもらう」(.86) など、すべてG「賞賛・承認希求」の項目で構成されていた。他者から誉めてもらったり、認めてもらおうとする行動であると考えられるため、第6因子を「賞賛・承認希求」と命名した。第7因子は、36 B「勉強などで顔やスタイルが良くないのを補おうとする」(.73), 5 B「勉強や運動など他のところで努力する」(.70) のように、すべてB「代理補償」の項目で構成されていた。勉強や運動、性格など容姿・容貌とは異なる領域で努力しようとする行動であると考えられるため、第7因子を「代理補償」と命名した。

感情項目および反応行動項目の因子分析において、2つ以上の因子に.40以上の負荷量を示している項目を除き、各因子に.40以上の負荷量を示した項目の α 係数を算出したところ、.67～.97と、十分な内的一貫性が確認されたため、各因子に.40以上の負荷量を示した項目の平均を算出して、各得点とした(第1因子「不満感情」の得点を、不満感情得点と呼ぶこととし、第2因子以降も同様とする)。なお、自己肯定感情得点は、得点が高いほ

ど、自身を肯定していることを表すように得点化した。

感情得点と反応行動得点の重回帰分析 それぞれの反応行動がどの感情によって生起しているかを検討するため、感情得点6得点を説明変数とし、反応行動得点7得点を従属変数として、各学校段階ごとに重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table 4)。 $\beta>|.25|$ を目安に、重回帰分析の結果をみると、中学生、高校生、大学生のいずれにおいても、直接的な努力得点と憧憬感情得点との間に関連がみられた。また、他者攻撃得点や賞賛・承認希求得点とは敵意感情得点に関連しており、気晴らし得点とは不満感情得点に関連していた。放置得点と代理補償得点とは悲哀感情得点と自己肯定感情得点に関連していた。他者回避得点については、中学生と高校生では不満感情得点と関連していたが、大学生においては悲哀感情得点との関連がみられた。このことから、どの学校段階においても、他者回避をのぞいて、特定の感情と特定の反応行動の結びつきが読み取れる。

これら以外に、直接的な努力得点は、高校生において不満感情得点との関連がみられ、大学生では悲哀感情得点との関連がみられた。他者攻撃得点は、中学生において不満感情得点との関連がみられた。気晴らし得点は、大学生において自責感情得点との関連がみられ、賞賛・承認希求得点は、中学生と高校生において不満感情得点との関連がみられた。

考 察

青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときの反応行動

青年期における劣等感の反応行動を分類することが、本研究の第1の目的であった。反応行動項目の因子分析の結果、青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときの反応行動は、7種類に分類された。そして、7種類の反応行動すべてが、いずれかの学校段階において、劣等感の具体的感情である不満感情、悲哀感情、敵意感情、自責感情と関連していたことから、本研究で得られた7種類の反応行動は、容姿・容貌に対する劣等感の反応行動であると言えるであろう。

「劣等感をもつことは当人にとって苦しみである。そのため何とかこれから脱したいと考え、これが向上への努力になり駆動力になることがある」(詫摩, 1986)や「劣等感の補償作用として、自己否定どころか、極めて建設的な行動パターンがとられる場合」(深谷, 1975)があるという指摘があるが、本研究でみられた「直接的な努力」や「代理補償」は、劣等感が「向上への努力」

Table 3 反応行動項目の因子分析結果（最尤法・promax回転後）

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	h^2	平均(標準偏差)
第1因子「他者回避」									
6 M: たくさんの人がいる場所を避ける	.82	.01	-.01	-.02	-.09	-.10	.09	.58	2.13(1.15)
10 L: 目立たないように振舞う	.79	.04	-.21	.03	.02	-.01	.15	.57	2.34(1.19)
42 L: 人から見られないようにおとなしくする	.73	-.02	.09	-.01	.02	-.06	.08	.58	1.99(1.06)
27 M: できるだけ一人でいるようにする	.68	-.14	.09	-.17	-.02	.03	.17	.47	1.79(1.00)
31 L: 人前ではできるだけ下を向く	.67	.00	.03	.09	-.10	-.01	-.05	.46	1.76(0.99)
50 L: 目立たない髪型や服装をする	.63	-.12	-.10	.16	.08	.09	.03	.46	1.85(1.17)
47 M: 人とならんで歩かないようにする	.51	-.05	.22	-.06	-.02	.11	.03	.43	1.48(0.74)
45 M: 顔やスタイルが良い人がいるところを避ける	.49	.14	.32	.04	-.01	-.11	-.02	.51	1.75(0.97)
39 C: 自分の顔やスタイルを見ないようにする	.36	.06	.11	.11	.16	.05	.03	.36	2.06(1.10)
第2因子「直接的努力」									
28 A: 顔やスタイルが良くなりそうな方法を試す	-.08	.96	.02	-.10	.02	-.02	-.07	.74	2.74(1.32)
19 F: 顔やスタイルが良い人を目標・見本にする	-.03	.85	-.12	.06	.02	-.10	-.04	.60	3.08(1.33)
41 A: 顔やスタイルが良く見えるような工夫をする	-.07	.80	-.04	-.06	-.02	.02	.08	.63	2.80(1.29)
1 A: スタイルを良くするためにダイエットや運動をする	.02	.67	-.11	-.02	-.11	-.02	-.03	.39	2.72(1.13)
51 F: 顔やスタイルが良い人からアドバイスをもらう	-.01	.58	-.03	.11	-.05	.13	-.06	.46	2.11(1.17)
3 F: 顔やスタイルが良い人の服装や髪型を真似する	.04	.54	.08	.09	-.07	-.06	.08	.43	2.41(1.20)
40 F: 顔やスタイルについて誰かに相談する	.09	.51	-.13	.00	.00	.35	-.14	.44	1.91(1.11)
11 A: 髪型や服装を変える	.00	.46	.12	.17	-.11	-.09	.13	.43	2.74(1.22)
21 H: 自分の顔やスタイルをネタにして笑わせる	-.07	.22	.10	.12	.20	.04	.05	.21	2.09(1.17)
第3因子「他者攻撃」									
43 K: 他の人を低く評価する	.06	-.02	.82	-.06	-.05	-.04	.01	.61	1.59(0.88)
48 J: 顔やスタイルが良い人の悪口を言う	-.02	-.05	.79	.02	.01	-.13	-.06	.49	1.33(0.67)
35 J: 顔やスタイルが良い人に冷たくする	.01	-.09	.77	-.04	-.05	-.03	-.04	.48	1.31(0.67)
26 K: 他の人を見下す	.02	.01	.70	-.14	.01	.07	-.01	.50	1.60(0.87)
4 J: 人に意地悪をする	-.06	-.24	.69	.21	-.08	-.01	-.10	.44	1.37(0.74)
29 K: 自分よりも顔やスタイルが良くない人を見て安心する	.08	.24	.47	-.17	.08	.11	-.01	.42	2.04(1.11)
17 J: 誰かに八つ当たりする	.12	-.05	.46	.21	-.04	.08	-.20	.38	1.73(1.03)
7 K: 自分よりも顔やスタイルが良くない人とくらべる	.17	.28	.43	-.16	-.01	.06	.04	.43	1.99(1.11)
9 C: 自分の顔やスタイルは悪くないと思込む	.04	.06	.27	.00	.10	.05	.24	.29	2.11(1.04)
第4因子「気晴らし」									
24 I: 友だちと一緒にいるようにする	.11	-.06	-.17	.84	-.09	.08	-.08	.58	2.57(1.26)
38 I: 必ず誰かのそばにるようにする	.07	-.04	-.08	.80	-.13	-.01	.02	.58	2.27(1.17)
25 D: 気にしないためにテレビや映画を観る	.12	-.09	.07	.59	.13	.00	-.03	.44	2.30(1.18)
13 I: 積極的に人の輪の中に入る	-.24	.02	.07	.57	-.09	-.01	.20	.51	2.45(1.21)
37 H: 明るく振舞う	-.06	.20	-.15	.50	.09	-.02	.23	.52	3.06(1.31)
2 D: 音楽を聴いてごまかす	.07	.19	.08	.50	.07	-.06	-.13	.38	2.24(1.15)
44 D: 気晴らしにマンガや雑誌を読む	.11	.13	.13	.45	.21	-.06	-.18	.39	2.47(1.32)
33 I: 顔やスタイルが良い人と一緒に行動する	.04	.04	.06	.37	-.07	.12	.06	.28	1.96(0.96)
52 H: 人前で目立つような行動をする	-.19	-.04	.26	.35	-.05	.11	.16	.39	1.76(0.98)
15 H: 人から注目されるような服装や行動をする	-.21	-.01	.34	.34	-.03	.07	.12	.41	1.81(0.97)
第5因子「放置」									
8 E: そのまま放っておく	-.13	-.02	-.05	-.12	.87	.01	-.10	.65	3.10(1.34)
32 E: そのままにしておく	-.06	-.11	-.03	-.09	.82	-.01	-.04	.64	2.88(1.37)
14 E: 何かすることもできないとあきらめる	.15	.02	-.02	-.04	.62	.00	-.05	.44	2.62(1.29)
22 E: 今のままで我慢する	.18	-.07	-.16	.11	.58	-.01	.04	.44	2.71(1.18)
49 C: 顔やスタイルが良くななくても構わないと開き直る	-.11	-.02	.06	.01	.58	.05	.20	.44	2.62(1.25)
20 C: 顔やスタイルは重要ではないと思込む	.00	-.06	.15	.23	.34	-.10	.20	.34	2.40(1.15)
第6因子「賞賛・承認希求」									
34 G: はげましの言葉をかけてもらう	.00	-.08	-.03	.10	.00	.92	-.05	.79	1.64(0.87)
23 G: 誰かになぐさめてもらう	.01	.01	-.10	.13	.00	.86	-.06	.73	1.71(0.89)
46 G: 自分の顔やスタイルは悪くないと誰かに言ってもらう	.02	.07	.07	-.14	.02	.70	.14	.63	1.65(0.89)
12 G: 誰かに自分の顔やスタイルをほめてもらう	-.11	-.02	.13	-.05	-.03	.62	.21	.53	1.77(0.99)
第7因子「代理補償」									
36 B: 勉強などで顔やスタイルが良くないのを補おうとする	.20	-.03	-.03	-.07	.01	.04	.73	.51	2.30(1.18)
5 B: 勉強や運動など他のところで努力する	.16	-.09	-.18	.01	-.07	.03	.70	.39	2.84(1.18)
30 B: 顔やスタイル以外でアピールする	-.02	.06	.06	.08	.06	.03	.65	.60	2.46(1.20)
18 B: 自分の内面(性格)を良くする	.01	.21	-.14	.24	.03	-.07	.42	.41	2.72(1.23)
16 D: やけ食いををする	.23	.10	.19	.13	.05	.15	-.25	.29	1.73(1.06)
得点間相関(左下) \ 因子間相関(右上)									
回避	回避	努力	攻撃	気晴	放置	賞賛	代理		
他者回避	-.24	.43	.23	.34	.29	.02		1.89(0.74)	
直接的努力	.25	-.39	.52	.01	.49	.49		2.56(0.90)	
他者攻撃	.50	.34	-.45	.25	.57	.32		1.62(0.63)	
気晴らし	.30	.49	.37	-.20	.45	.51		2.48(0.86)	
放置	.28	-.09	.14	.12	-.18	.25		2.78(0.97)	
賞賛・承認希求	.29	.47	.53	.44	.12	-.34		1.69(0.77)	
代理補償	.20	.46	.23	.51	.19	.36	-.25	2.58(0.92)	
各因子への負荷量が.40以上の項目の α 係数									
	.88	.88	.85	.83	.81	.87	.77		

- a) 項目番号後のアルファベットは予備調査から得られた分類を表している: A 直接的努力, B 代理補償, C 回避的思考, D 気晴らし, E 放置, F 他者依拠, G 賞賛・承認希求, H 注目希求, I 他者接近, J 他者攻撃, K 下方比較, L 注目回避, M 他者回避
- b) 各因子に対し.40以上の負荷量を太枠で囲った。
- c) 記載されている得点間相関はすべて5%水準で有意である。

Table 4 各学校段階における感情得点を説明変数、反応行動得点を従属変数とした重回帰分析

	他者回避	直接的 努力	他者攻撃	気晴らし	放置	賞賛・承認 希求	代理補償
中学生	不満	.64***	-.33***	.32***	-	.28**	-
	悲哀	-	-	-	.33***	-	.41***
	敵意	-	.22**	.50***	-	.28**	-.19*
	肯定	-	-	.17*	.30***	.19**	.43***
	憧憬	-	.48***	.17*	-	.17*	-
	自責	-	-.18*	-	-.23**	-	-
	R ²	.41***	.32***	.47***	.17***	.33***	.20***
高校生	不満	.57***	.45***	.17**	.44***	-.29***	-
	悲哀	-	-	-	.42***	-	.28***
	敵意	-	-	.56***	-.17*	.30***	-
	肯定	-	-	.17**	.35***	.17**	.31***
	憧憬	-	.29***	-	-	-	-
	自責	-	-.22**	-	-	-	-
	R ²	.33***	.30***	.47***	.19***	.28***	.13***
大学生	不満	-	-	.41***	-	-	-
	悲哀	.58***	.38***	-	.32***	-	.34***
	敵意	-	-	.62***	-	.53***	-
	肯定	-	-	-	.42***	-	.31***
	憧憬	-	.39***	-	-	.19*	-
	自責	-	-	.30**	-	-	-
	R ²	.34***	.40***	.39***	.38***	.35***	.19***

a) $\beta > |.25|$ の値を太線で囲った。また、すべての学校段階で $\beta > |.25|$ の値がみられた部分には網掛けをした。

b) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

となった反応行動であり、Adler(1932 など)が概念化した「補償」や「代理補償」に相当すると考えられる。容姿・容貌の劣性に対し、容姿・容貌自体を改善しようと努力したり、容姿・容貌の劣性を補うために、学業や性格、スポーツなど異なる領域で努力したりすることである。

一方、「他者回避」、「他者攻撃」、「気晴らし」、「放置」という反応行動も確認された。「他者回避」は、Wallin(1949)が逃避反応と述べたものに相当し、「自分がなんらかの点で劣っていることを意識して、とくに他人の前では自己表現をすることをせず、自分を抑制しがち」(返田, 1986)な反応行動である。「他者回避」に対して、「他者攻撃」は、他者、特に自分よりも容姿・容貌が優れている者に対して、攻撃的な行動をとる反応である。宮城(1979)は、周囲に当り散らすことによって劣等感を補償しようとする「運動暴発的補償」や、それを土台として、意識的、意志的に暴力で威嚇しようとする「攻撃的補償」を挙げているが、「他者攻撃」は、この「運動暴発的補償」や「攻撃的補償」に相当する

ものであろう。Adler(1932 など)は、劣等感が非行を引き起こす原因となりうることを指摘しているが、「他者攻撃」はこの指摘と関連するものであると考えられる。「気晴らし」は、筒井(1975)が補償行動のひとつとして挙げた「当面の事柄と関係ない気晴らしに夢中になる」ことに相当する。因子分析で負荷量の高かった項目をみると、これまで指摘されてきた「空想への逃避」(根本, 1997 など)による気晴らしというよりも、友だちとの関わりや趣味など現実的で楽しい行動をすることによって、容姿・容貌の劣性を認知しないようにしている行動であると考えられる。これらに「放置」を加えた4種類の反応行動について、小笠原・甲村(1999)の調査では、これら4種類に相当する対処行動はいずれも「効果がなかった」と評価されていることから、これらのような反応行動を示す青年には、何らかの指導や支援が必要になってくるであろう。

他者からの支援を求める行動として「賞賛・承認希求」がみられた。劣等感を抱く児童・青年に対する指導や支援として、「賞賛すること」(山本, 1957)や「子ど

もの現実の姿を肯定的に評価すること」(野田, 1997) などが指摘されており, また, Hauck (1997) は劣等感の克服法として, 「自分を尊敬してくれる人を見つけること」(make people respect you) を挙げている。容姿・容貌の劣性により劣等感を感じ, 自己評価が低下している青年にとっては, 他者からの賞賛や受容は, 劣等感を克服する上で重要であり, それは, 劣等感を抱いている青年も求めていることであろう。劣等感を抱いている青年が発する賞賛・承認希求を敏感に捉えることが, 劣等感を抱く青年の指導や支援において必要なことであると考えられる。

青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連

学校段階別に重回帰分析を行った結果, どの学校段階においても, ある反応行動が特定の感情と結びついていることが明らかとなった。まず, 憧憬感情と直接的努力との関連がみられた。Neu (1980) は, 妬みを憧憬的妬み (admiring envy) と悪意的妬み (malicious envy) に分類し, 憧憬的妬みは, 優れた他者のようになるまで自分を高めようと望む感情であるとしている。憧憬感情と直接的努力の関連が示されたことは, Neu (1980) の指摘を踏まえると, 妥当な結果であると言えよう。つまり, 他者に憧れる気持ちが, 容姿・容貌の改善に向けた努力へとつながるのである。次に, 敵意感情は他者攻撃と賞賛・承認希求と関連がみられた。「攻撃反応を誘起する情動は, ふつう, 怒りや憎しみ」(大淵, 1993) であると言われるように, 他者への敵意的な感情が攻撃行動を引き起こすことは, 十分に理解される結果であると考えられる。一方で, 敵意感情は他者からの賞賛や承認を求める行動とも関連を示した。山本 (1957) は「(劣等感に対して) 攻撃的反応を示すもので, 劣等感の克服に真正面から取り組んでいるものに対しての激励と賞賛はいっそう効果的である」と述べているが, これは, 攻撃的反応を示す者に, 他者からの賞賛や承認を求める気持ちがあるからであろう。ここから, 敵意感情は, 他者を攻撃することで強い自分を他者に認めてもらおうとする動機をもった感情であると考えられる。3点目として, 不満感情と気晴らしとの関連がみられた。顔やスタイルが人よりも良くないことに納得はできないが, どうすることもできないと考えるために, 顔やスタイルが良くないことを考えずにすむような気晴らし行動が生じるのだと考えられる。ここから, 気晴らしは劣等感を感じないようにするための一つの適応的な行動であると言えるかもしれない。4点目として, 悲哀感情と自己肯定感情は, とともに放

置と代理補償と関連していた。Malatesta & Wilson (1988) は悲しみの先行条件として効力感の欠如を挙げており, 埴・小松 (2000) も「自分の力不足を知り, どうにもならないと気づくことで悲しみを経験するのかもしれない」と述べている。これらから, 悲哀感情は, いくつもの改善方法を試みても, 顔やスタイルが良くならず, 自分の努力では改善することができないことが明らかとなったことによって生じる感情であると考えられる。どんな方法を用いても顔やスタイルが改善できないため, 顔やスタイルに対しては何もしないが, その代わり, 別の領域において顔やスタイルが良くないことを補おうとしているのであろう。Frijda (1986) は, 満足と活動しないという行動との間の関連を示しているが, 自分の顔やスタイルを受け入れているからこそ, 顔やスタイルに対しては何もしないのであろう。しかし, 自己肯定感情は代理補償とも関連していたことから, Frijda (1986) が示したように, 満足したから活動をしなくなるということではなく, 顔やスタイルを受け入れることができていることが, 他の領域に対する動機づけをもたせる出発点になっていると考えられる。このように, 悲哀感情は, 自分では容姿・容貌をどうすることもできないために容姿・容貌を放置し, 他の領域で努力しようとする感情であるのに対し, 自己肯定感情はすでに自身の容姿・容貌に満足しているために容姿・容貌を放置し, 他の領域へ働きかけようとしている感情であると考えられる。このような悲哀感情と自己肯定感情の働きの違いについては, 今後さらなる検討が必要であろう。最後に, 他者回避とは, 中学生や高校生では不満感情が関連し, 大学生では悲哀感情が関連していた。中学生や高校生では, 他者と近づくことにより, 自分の顔やスタイルが良くないことを再認識してしまうために, 不満感情と他者回避が関連し, 大学生になると, すでにどうすることもできないという失望が, 他者との関わりから遠ざけるのであろう。

本研究の問題点と今後の課題

本研究の結果, 容姿・容貌に対する劣等感の感情的感情と反応行動との間に特定の結びつきがあることが確認された。青年が容姿・容貌に対する劣性の認知によってどのような感情を感じているかによって反応行動が異なることが示され, これにより, 教師やスクールカウンセラーのような劣等感を抱いている青年に関わる者が, 反応行動から青年が感じている劣等感の感情的感情を推測することができるようになるとともに, 推測された劣等感の感情的感情によって, 青年に対す

る対応やサポートを使い分けるための資料となりうる
と考える⁴。

一方、本研究の問題点として、各得点の低さが挙げられる。感情項目や反応行動項目の多くは、2点台であり、1点台も散見される。これは、容姿・容貌に対する劣等感を非常に強く感じていたり、ある反応行動をかなりの頻度で行っている一部の青年がいる一方、多くの青年は、普段の生活の中で、それほど強く劣等感を感じることもなく、また反応行動もほとんどしていないと考えられるためであろう。本研究では、このように強く劣等感を感じている青年と、それほど強く感じてはいない青年とを区別することなく、全体的な傾向を把握することを目的として検討を行った。今後は、特に強く劣等感を感じている青年を取り上げて、本研究の結果を再検討する必要があるだろう。

また、本研究では容姿・容貌に対する劣性を取り上げた。しかし、劣等感については、学業や性格、運動能力、友人関係や異性関係など多様な要因が指摘されている(西平, 1964; 高坂, 2008など)。本研究で得られた結果は、どの要因に対しても一貫して言えることなのか、それとも、要因によって感情と反応行動の結びつきが異なるのかは検討する必要があるだろう。

さらに、本研究では、感情と反応行動との関連について検討し、特定の感情と反応行動との結びつきを明らかにした。これにより、従来、列挙されるだけであった反応行動の生起のメカニズムの一端を解明できたと考える。本研究では、中学生、高校生、大学生に共通にみられる感情と反応行動との結びつきに注目して考察を行ったが、学校段階ごとで独自の結びつきもみられた。このような各学校段階独自の結びつきがどのような発達の意味をもつかについては、本研究だけでは十分に理解することはできず、さらなる検討が必要である。また、劣性の認知によって生じる反応行動の違いについては検討したが、劣性の認知によって生じる感情の違いがなぜ生じるのかについては、検討しなかった。澤田・新井(2002)は、妬み状況における対処方略の選択に、領域重要度や獲得可能性が関連していることを示している。領域重要度や獲得可能性(本研究に置き換えると、顔やスタイルを改善できる可能性)が、生じる感情に影響を与えている可能性は、十分に考えられる。各学校段階独自の結びつきの発達の意味を理解する上でも、今後、感情の生起に関わる要因を含めることで、

劣性を認知し、感情が生じ、それに対して反応行動が生起されるという一連の過程を明らかにすることが必要であろう。

引用文献

- Adler, A. (1932). *What life should mean to you*. Boston, MA: Little, Brown. (アドラー, A. 高尾利数(訳) (1984). 人生の意味の心理学 春秋社)
- Allport, G. W. (1937). *Personality*. New York: Henry Holt. (オルポート, G. W. 訃摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀 正(訳) (1982). パーソナリティ—心理学的解釈 新曜社)
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, **47**, 180-190. (Enomoto, J. (1999). Socio-emotional development of friendship among adolescents: Activities with friends and the feeling for friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 180-190.)
- Frijda, N. H. (1986). *The emotions*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 深谷和子 (1975). 劣等感の診断 児童心理, **29**(11), 97-101.
- 埴 明子・小松孝至 (2000). 児童期における情動経験—怒り, 悲しみ, 喜び, 恥の比較と発達の变化・性差の検討— 東京大学大学院教育学研究科紀要, **39**, 301-312.
- Hauck, P. A. (1997). Three ways to overcome inferiority feelings. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, **15**, 57-69.
- 菊池章夫 (2003). TOSCA-3(短縮版)日本語版の検討 岩手県立大学社会福祉学部紀要, **5**, 35-40. (Kikuchi, A. (2003). An examination of a Japanese form of TOSCA-3. *Bulletin of the Faculty of Social Welfare, Iwate Prefectural University*, **5**, 35-40.)
- 高坂康雅 (2008). 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達の变化 教育心理学研究, **56**, 218-229. (Kosaka, Y. (2008). Developmental changes in inferiority feelings in adolescents and young adults: Important areas of the self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **56**, 218-229.)
- 高坂康雅 (印刷中). 青年期における容姿・容貌に対

⁴ 本研究結果について、調査対象となった中学校及び高校の学校長、教頭、生徒指導主事等に著者自身から直接口頭にて伝えられた。また、学級担任等へは、紙面にて結果が報告された。

- する劣性を認知したときに生じる感情の発達的变化 青年心理学研究, **20**. (Kosaka, Y. (in press). Developmental changes of feeling generated by recognized inferiority in appearance in adolescence. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **20**.)
- 工藤 力 (1986). 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, **57**, 293-299. (Kudoh, T. (1986). A study of the feeling of loneliness in pubertal youth. *Japanese Journal of Psychology*, **57**, 293-299.)
- Malatesta, C. Z., & Wilson, A. (1988). Emotion cognition interaction in personality development : A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, **27**, 91-112.
- 宮城音弥 (1979). 劣等感 その本体と克服 東京選書
- 宮下一博・細川あゆみ (1993). 孤独感と性格・適応及び対処方略との関係 千葉大学教育学部研究紀要, **41**, 33-38. (Miyashita, K., & Hosokawa, A. (1993). The relations of loneliness to personality traits, adjustment, and coping strategies in adolescence. *Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University*, **41**, 33-38.)
- 根本橋夫 (1997). 劣等感をバネにする生き方 児童心理, **51**(7), 16-22.
- Neu, J. (1980). Jealous thoughts. In A. O. Rorty (Ed.), *Explaining emotions* (pp. 425-463). Berkeley, CA : University of California Press.
- 西平直喜 (1964). 青年分析 大日本図書
- 野田俊作 (1997). 劣等感をもつ子の行動と心理 児童心理, **51**(7), 1-9.
- 野村東助 (1981). 劣等感 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田 新 (監) 新版心理学事典 (p. 829) 平凡社
- 大淵憲一 (1993). 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- 落合良行 (1989). 青年期にみられる顔に対する劣等感の分析 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 224.
- 小笠原昭彦・甲村和三 (1999). 他者との比較による優劣感情に関する研究 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, **11**, 53-65. (Ogasawara, A., & Kohmura, K. (1999). Superior and inferior attitudes accompanied with comparing oneself with others. *Bulletin of Nagoya City University of Nursing*, **11**, 53-65.)
- 岡安孝弘 (1999). コーピング 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 (p. 276) 有斐閣
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響 教育心理学研究, **50**, 246-256. (Sawada, M., & Arai, K. (2002). Dispositional envy, domain importance, and obtainability of desired objects : Selection of strategies for coping with envy. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 246-266.)
- 関 計夫 (1974). 劣等感 内山喜久雄 (監) 内山喜久雄・上出弘之・高野清純・小川捷之 (編) 児童臨床心理学事典 (pp. 711-712) 岩崎学術出版会
- 島 久洋 (1988). 青年の容姿と適応感 青年心理学研究, **2**, 12-25. (Shima, H. (1988). Adolescent appearance and feeling of adequacy. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **2**, 12-25.)
- 返田 健 (1986). 青年期の心理 教育出版
- 高田利武 (1994). 日常事態における社会的比較の様態 奈良大学紀要, **22**, 201-210. (Takata, T. (1994). Some aspects of social comparison in everyday life. *Memoirs of Nara University*, **22**, 201-210.)
- 高田利武 (1999). 日常事態における社会的比較と文化的自己観—横断資料による発達の検討— 実験社会心理学研究, **39**, 1-15. (Takata, T. (1999). Social comparison in everyday life and the cultural view of self : A developmental analysis based on cross-sectional data. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **39**, 1-15.)
- 詫摩武俊 (1986). 青年の心理 改訂版 培風館
- 筒井建雄 (1975). 子どもが劣等感を抱く「とき」 児童心理, **29**(1), 43-50.
- Wallin, W. (1949). *Personality maladjustments and mental hygiene*. New York : McGraw-Hill.
- 山本三郎 (1957). 劣等感の心理 波多野完治 (著者代表) 現代教育心理学体系第11巻 適応理論 (pp.

125-143) 中山書店

(2008.3.7 受稿, 8.19 受理)

依田 新 (1982). 人間理解の心理学 金子書房

Feelings and Reactive Behavior Generated by Self-Recognized Inferiority in Appearance in Adolescents

YASUMASA KOSAKA (INSTITUTE OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCE, TSUKUBA UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2009, 57, 1-12

The present study investigated relationships between feelings and reactive behaviors of adolescents and young adults about inferiority in their appearance. The participants, junior high school students (7th, 8th, and 9th grades ; $N=207$; average age, 13.16), senior high school students ($N=188$; average age, 15.72), and university students ($N=150$; average age, 20.33), completed a questionnaire about recognition of inferiority in their appearance, related feelings, and related reactive behavior. Factor analysis of the items on related feelings resulted in the extraction of 6 factors : dissatisfactory feelings, sad feelings, hostile feelings, self-affirmative feelings, yearning feelings, and self-reproach feelings. Factor analysis of the items on reactive behaviors resulted in the extraction of 7 factors : evasion of others, direct efforts, aggression toward others, pastime, neglect, desire for approval from others, and vicarious compensation. In all age groups, direct efforts were related to yearning feelings ; aggression toward others and desire for approval from others were related to hostile feelings ; pastime was related to dissatisfactory feelings ; and neglect and vicarious compensation were related to sad feelings and self-affirmative feelings.

Key Words : inferiority feelings about one's appearance, reactive behavior, adolescents, young adults